

霧多布湿原学術研究報告書

霧多布湿原における木本生植物の更新動態に関連する菌類相の研究

北海道大学大学院農学研究科
森林資源生物学研究室

<目的>

木本生植物（樹木）の更新動態については、種子の着生から成長、枯死、分解に至るまで、多くの菌類が関与している。霧多布湿原のような湿地環境についても例外ではないと考えられるが、同環境における菌類に関する情報は著しく欠如している。そこで本研究は、湿地環境における菌類相を明らかにするために、まず大型菌類（きのこ類）についての生息状況を調査することを目的とした。

<調査方法>

平成14年7月に霧多布湿原内およびその周辺域において予備調査を行い、木本生植物の植生状況、立地環境条件およびアクセス等の面から、霧多布湿原センターに隣接した林分内に調査プロットを設定した。

8月から10月にかけて月1回合計4回大型菌類の調査を行い、きのこ類の発生状況を記載し、標本を採取した。

<調査結果>

フウセンタケ科14種、キシメジ科10種、ベニタケ科3種、モエギタケ科3種、テングタケ科3種、ヒトヨタケ科2種、ホウキタケ科1種、ホコリタケ科1種、イッポンシメジ科1種、カレエダタケ科1種、スッポンタケ科1種、タコウキン科1種、チャワソコ科1種、不明3種、合計47種の発生を確認し、子実体標本を採取した。（採取菌リストおよび標本写真を参照）発生箇所は23種が湿地、24種が林地であった。22種が外生菌根菌、15種が腐生菌（リター分解菌）、5種が木材腐朽菌であった。外生菌根菌は主として木本植物の根系に外生菌根を形成し、養分や水分の供給に深い関連を持つ。腐生菌は分解者として森林生態系の物質循環に関連する。木材腐朽菌も分解者であるが、強い木質分解能を持つため、樹病菌として樹木を枯死させる種もある。食毒区分は10種が食用菌、3種が毒菌、2種が要注意（食毒両方の記述がある）、1種が食不適（無毒だが食に適さない）、他は食毒不明であった。

Table with columns: 採取菌リスト, Fungal name, Family, Genus, Species, Habitat, Date, etc. Includes entries like Amanita sp. (1), Laccaria sp. (1), Collybia confluence, etc.

合計47種 (不明種を含む)
採集したもの5は本字で示した



1



4



2



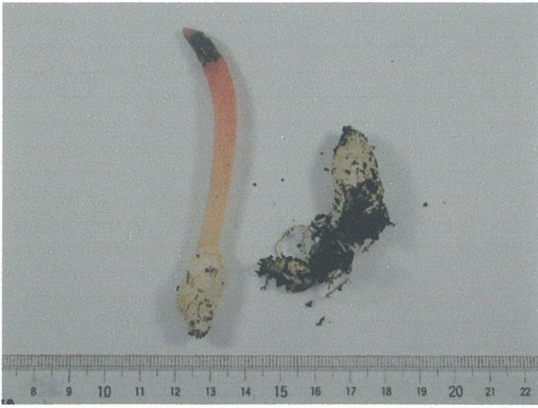
5



3



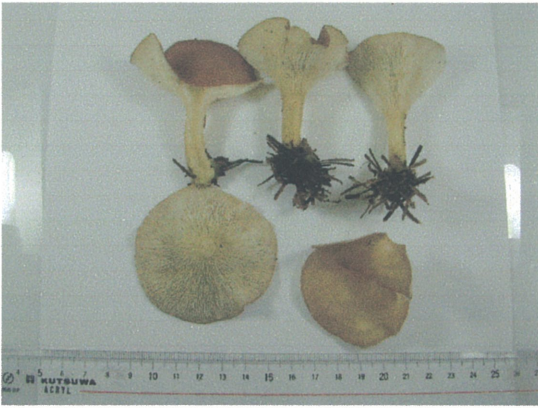
6



7



10



8



9



11



14



12



15



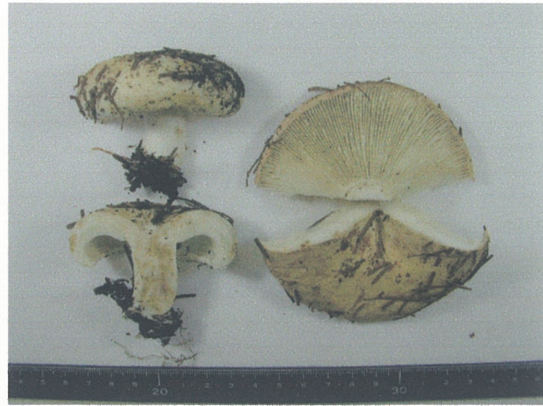
13



16



17



20



18



21



19



22



23



26



24



25



27



30



28



31



29



32



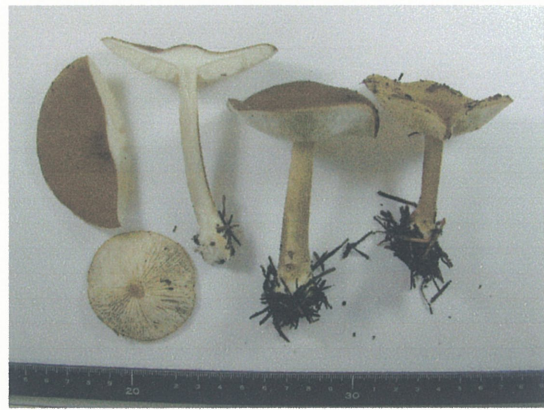
33



36



34



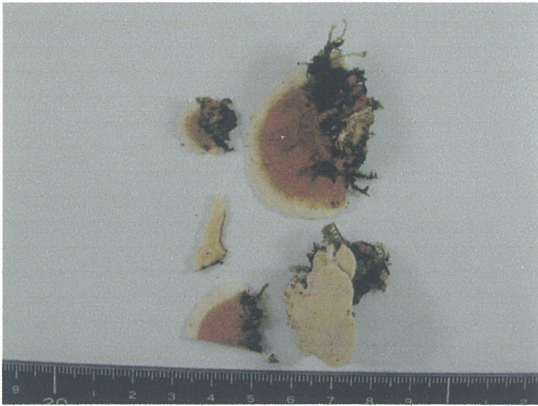
37



35



38



39



40



41



44



42



45



43



46



47



50



48



51



49